

令和6年度新潟建築賞設計コンペ 講評

審査員長 河内 一泰

大賞 越後の三柱室

縄文時代の竪穴式住居や民家の土間など、土と建築のつながりをかたちにした建築です。地中15mまで届く3本の柱は20度という地中の安定した温度を地上へ供給する設備でもあり、建築の主要な構造でもあります。地域ならではの建築の形を問うこのコンペにおいて、地域の固有性よりも人間と土の初源的な関係に着目した点がストーリーとしての広がりをつくりました。

良い建築とは、歴史・風景・配置・外観・内観・ディテールというように大きなものから小さなものまでつながっている建築だと私は考えています。ディスアークバニズムの話や敷地選び、ヒートパイプの設備、3本柱の構造、非構造の外壁と開口、四角の中に三角が入る平面計画など、一貫性のある建築だと感じました。屋根まで突き出た柱が融雪を兼ねているのも良いと思います。この作品の延長に設備的な柱ではなく内部を持つ空間的な柱による建築を想像しました。

優良賞 長岡の家

田園の風景から市街地の風景を引き算した建築です。水平に広がる風景に対してリボン状の壁で囲い斜め下と斜め上に開く形をしています。田んぼへの接地を最小限にして家を浮かせることで風景と建築を平行に置いているのが面白いと思います。パネルと模型は最小限の表現で想像させるプレゼンテーションでした。風景を取捨選択する建築のかたちとして外壁の帯の幅がやや大きいと思いますが、ピロティ形式や入子状の平面計画など、この敷地の風景ならではの形をもつ建築であると思います。

優良賞 積層の九十九折り

九十九折りの地形に対して壁をくさび状に配置した建築です。通常の斜面地での建築の造成は壇状になりますが、元ゴーカートコースの九十九折の地形から建築を考えた点がこの作品のオリジナリティです。住宅と工房を微細なスキップフロアで配置し元ゴーカートコースの共用動線を重ねる形式は面白いと思います。くさび状の壁は居室の幅を変化させ視線の向きや住宅と工房の混じり方を多様にしています。屋根も九十九折の地形から考えればもっと良い建築になったのではないかと思います。

## 全体講評

地域の建築を考えることが新しい建築の可能性を広げる時代だと思います。私自身が抽象的な建築から具体的な建築へ興味が移ってきている事もありますが、固有の風景だったり、材料や構造から生まれる空間に魅力を感じています。固有の条件から個別解をつくる事を超えて新しい建築の一般解になり得るかという課題について、今回のコンペでたくさんの作品を見て考えさせられました。貴重な機会を頂きありがとうございました。